

保護者への情報提供と連携——大切な ステークホルダーとして

玉 真之介

(岩手大学 副学長)

はじめに——学生とは——

現在の大学において、学生をどのような存在として位置付けるか、なかなか難しい問題である。大学がエリート養成の場であった時代には、「一人前の大人」として扱うのが当然であり、現在でもその考えは教員の間に広く浸透している。この見方からすれば、学生になるべく手を貸さず、なんでも自分たちで対応させるのが原則ということになる。自主性を育てる観点から、学生指導におけるこうしたスタンスは、確かに普遍的な側面を持っている。

しかし、マーチン・トロウが言うマス段階、ユニバーサル段階に達した今日の大学で、学生を「一人前の大人」と位置付けるのは正しくないと思われる。日本の場合、ほとんどの学生が経済的に自立しておらず、保護者からの学資支援で学生生活をおくっている。明らかに社会人として自立する前の段階であり、実際の学生の実態も「一人前の大人」として扱うには、あまりにも未成熟である。

中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（平成一七年一月）は、「二十一世紀型市民」という言葉を使い、大学が「技能や知識の習得のみを目的とするのではなく、全人格的な発展の礎を築くためのもの」である側面を

強調した。それに先立ち、いわゆる「廣中レポート（大学における学生生活の充実方策について）」（平成一二年）は、「学生相談」を「問題ある一部の学生が行くところ」ではなく、「全ての学生を対象として、学生の様々な悩みに応えることにより、その人間的な成長を図る」ための「大学教育の一環に位置づける必要がある」とした。

このように、現在の大学において学生は「一人前の大人」（「二一世紀型市民」となる手前の、未成熟な存在として位置づけ、指導や支援を行う必要があると思われる。とするなら学生の保護者は、学資支援者として重要なこと。もちろん、学生の人間的な成長に関して協力し合うパートナーとも考える必要がある。この観点から以下では、岩手大学が行っている保護者への情報提供について紹介する。

二 入学オリエンテーション

少子化の影響もあり、保護者の子供への関わり方は強くなってきている。それを強く感じさせるのは、入学式への保護者の出席である。新入生一人に対して、両親がそろって出席することが多く、場合によっては祖父母も加わるこ

ともある。大学にとっては、会場の確保が大変である。こうした現象を「由々しき事態」と見る向きもあるが、それだけ保護者の学生や大学への期待が大きいと受け止めるべきである。

岩手大学は、入学式の機会を保護者へ情報を提供する大切な機会として重視してきた。入学式自体は、約一時間の式典である。その後、新入生と保護者を会場に残して、オリエンテーションを行っているが、そこで保護者への情報提供として重視しているのは、主に次の四つの点である。

一つは、大学の「建学の精神」を伝えることである。岩手大学では『岩手大学「学びの銀河」物語』という小冊子に、岩手大学の建学をめぐるドラマや今日に至る歴史を簡潔にまとめ、入学式に新入生と保護者に配付している。学生はもちろんであるが、大学の「建学の精神」を学資支援者である保護者に知っていただくことが、大学への信頼を得る上で大切と考えるからである。

二つ目は、メンタルヘルスへの協力依頼である。大学進学は、学生にとって大きな環境変化を意味する。この環境変化に上手く適応できない学生もあり、家族との生活から離れた喪失感が理由となるケースもある。そこで入学後し

ばらくの間は、保護者に学生を注意深く見守ってほしいことをお願いしている。

三つ目が、国立大学の運営費についてである。岩手大学の場合、一年間の運営費の七割が国からの運営費交付金で賄われている。つまり、入学金や授業料の倍以上の税金が投入されている。このこと知ってもらい、大学教育が公共的な使命を負っていることを理解してもらおうようにしている。

四つ目が、キャリア支援体制についてである。保護者は、学生の就職に強い関心をもっている。だからこそ、大学の支援体制を伝えることが信頼関係の醸成に重要と考えられる。岩手大学は、学生の就職をキャリア形成の出発点と位置付けて、キャリア教育や就職相談、就職支援などのキャリア支援を行っている。それを入学の段階で伝えておくようにしている。

三 保護者による授業モニター制度

岩手大学が行っているユニークな取組の一つに、保護者による授業モニター制度がある。岩手大学は、五月と一〇月にそれぞれ一週間、全学共通教育のすべての授業科目を

市民に一般公開している。これは、岩手大学が行っている授業改善の取組の一つであるが、その際、保護者に授業モニターを委嘱して、授業を参観して感じたことをメモにして提出していただいている。

この募集は、先の入学オリエンテーションの時に行う。つまり、入学後の大学への適応に関心を持ってもらう具体的な手だてとして活用をお願いしている。平日の日中でもあるので、実際に応募していただく保護者はのべ二〇名程度であるが、この機会に子どものアパートに泊まって暮らしぶりを知ったり、大学の授業について話しをしたりと、むしろ遠隔地の保護者に利用されている。

中には、久々に学生時代に戻った気分度で授業を聞き入ったという感想や、学生の受講態度が悪い、といったコメントも寄せられたりする。モニターの保護者と副学長との懇談会も行っているが、参加いただいた保護者には大変に好評である。いただいたコメントは、まとめて授業担当教員全員に還元するようにしている。

この保護者モニターは、全学共通教育についてであるが、専門教育についても、秋の大学祭に合わせて、保護者向けに授業公開と教員との懇談会、学内ツアーを行っている農学部のような取組もある。

四 成績表等の送付

大学への不適応もそうであるが、勉学意欲の喪失や進路の悩みなど、学生が悩みを抱えたとき、それは必ず学業成績に表れてくる。そうした成績に表れる変化を的確にキャッチして、相談にのり、必要な指導を行うことが学生の自立支援にとって重要である。本学では、主に担任教員が学生の成績に注意を払い、指導やアドバイスをするようにしているが、保護者にも成績表を情報として提供している。

新入生のみは一年前期の成績を一〇月に保護者に送付し、大学生生活への適応できたかどうか判断していただく指標として見ていただいている。二年次以降は全員、前年度までの成績を四月に送付することになっている。こうした成績表の送付に対して、保護者からの問い合わせは、毎年、数件ほどである。多くの保護者は、多少は心配しながらも、子どもを信頼してあまり干渉しないように見守っている。成績表は、そうした学生への信頼を確認する一つの手段だということもできる。

また、保護者だからこそ成績表に表れた小さな変化の兆

候を見つけ出すこともある。それが問い合わせとなって、学生の抱えている悩みが見つかる場合もある。もちろん、杞憂であればそれに越したことはない。いずれにしても、成績表の送付は保護者への重要な情報提供と考えている。

五 大学活動の情報提供

多くの大学と同様に、岩手大学も保護者によって組織される後援会があり、教育研究に対する経済的な支援をいただいている。後援会は学部単位で組織されているが、全学共通教育やサークル活動等の学部を越えた取組への支援のため、各学部後援会を会員に岩手大学後援会が組織されている。岩手大学では、『岩手大学後援会報』に、教育改善の取組やメンタルヘルス、就職支援などの大学の取組を簡潔にまとめ、大学の情報誌「Hi！岩手大学です」と一緒に保護者へ送付している。

大学の活動に関する情報提供は、ホームページも重要となっている。ホームページには、当然、様々な大学のニュースやイベント情報が掲載されているが、問題はページを開いてもらえるかどうかである。岩手大学では、そうしたホームページへの誘い水として、日常的な大学の活動や様

子をブログ風のページ「君大エクス」で紹介している。これは、学生にも加わってもらって、例えば、キャンパスの四季の彩りや教室での出来事等々、日常の大学風景を速いテンポで更新している。保護者にも、まずは岩手大学のホームページを開いて最初に見るページとして好評を得ている。

六 おわりに

学生が事件・事故に巻き込まれたとき、また修学上の問題が生じたとき、大学として保護者と連絡を取り、話し合っ
て、問題解決に向けて協力する必要がある場合がある。その数は、決して多くないが、その時には、保護者と大学との間の信頼関係が前提として重要である。その意味でも、保護者に対して大学は、様々な機会に大学の活動や学生の情報を的確に提供しておくことが重要と考えている。それにより、保護者からの信頼を得ることもできると思われる。

保護者は、何よりも学生の学資支援者として大学の重要なステークホルダーである。同時に、学生の自立支援に協力し合うパートナーとしても位置付け、そうした大学の考

え方を保護者に受けとめてもらうことも重要と思われる。